

---

# 夕日の思い出に...

璃

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

夕日の思い出に…

### 【Nコード】

N5015C

### 【作者名】

璃

### 【あらすじ】

水平線の陰謀より、蘭は10年前に見た夕日によるエピソードを思い浮かべる。それはある帰り道を歩く時の事

彼女は眺めていた。いつものように。

10年前に背景として、真紅に染まっていた夕日を。

幼なじみとも一緒に、赤味を帯びた光を、見た事。再び脳裏に鮮明に甦る。

買い物に出掛けた蘭と、大阪から訪問した和葉が、二人で他愛も無い会話をしていた。

コナンや平次や小五郎は、いつもの如く難事件の調査で別行動をしている。

蘭や和葉は三人を説得したものの、難事件を解きに行く方を選択したため、蘭と和葉が残った。残った二人は、休みを利用して買い物へと足を運んだ。

何かと行動をしている間に、時は過ぎ、今は夕方になった。

茜色に染まった夕日を、後ろにする。四方八方視線を泳がせる。

彼女達の艶麗な双眸が、巨大な物体を捉える。

眺めた光景を視線から背けて和葉が、不意に口許を緩ませる。

「夕日って綺麗やなあ」

感慨深くその一言を漏らす。

蒼くて艶やかな双眸を、蘭へと向けて嫣然と笑う。笑みを浮かべ

た頬が不意に緩んだ。

「うん。私も夕日はね好きなの。夕日にはちょっとした思い出があるから」

「ちょっとした思い出って工藤君の事でなの？」

和葉は、蘭の顔を覗き込んだ。やたらと『工藤君』という語句を印象付けて呟く。

端正としたその顔は、喜色を含む。明るい空気を漂わせて、視線を合わせる。

可憐いじらしいしい和葉は、何気に蘭に質問を訊ねた。

「うん。新一の事だけどやっぱり和葉ちゃんにはわかってしまうなあ。どうして夕日に新一との思い出が関係あるとわかったの？」

蘭は率直な想いを語る。

新一の事が絡むと直ぐに反応をする蘭としてはこの類いの話は聞き流さない。

和葉は、興味深く話しを聞く。

そして綺麗な双眸は辺りを見詰める。

和葉の言葉を発するのを待ち伏せてながら歩を進める。

「だって蘭ちゃんのあらゆる思い出話って工藤君の事しかあらへんやろ？ 因みにその夕日のエピソードってなんなんや？」

「10年前にね帝丹小学校で友達皆で隠れんぼをやったの。その時、新一はサッカーの試合とか言って隠れんぼに参加しなかったのよ」  
過去の出来事を、脳裏に浮かべながら語った。微笑を含みながら

次々と言葉を繋げる。

その時に体育館のステージの下の椅子を片付ける小さな隙間に隠れた事。蘭の隠れた”その場所”について然り気無い推理で見付けた事。

物事のあらましを流暢に述べる。

蘭は最後の言葉を溢そうと、口許を開けた。

「あとはね、新一の表情がやけに赤らんでいて……。私は何気にな『新一、顔が赤いよ』って言ったの。それで新一ね……。」  
含み笑いをしながら語る蘭の言葉が一気に、停止した。喋りそうになった声を隠そうとする。咄嗟に口許を結ぶ。

「蘭ちゃんどうしたの？ 急に黙りこんで」

和葉は、蘭へと視線を置いて質問をさた。

急に途切れた蘭の言葉が不可思議に感じた和葉が、脳裏に疑問符を浮かべる。

次第に彼女・和葉の双眸は大きく見開いた。口許だけを緩ませて、驚愕の表情を見せた。

最近に足を動かした時と同じペースで歩を進める。斜め前を捉えていた視線を徐に蘭の方へと移した。さつきとは真逆な表情を見せ示す。炯々とした双眸で蘭を凝視する。

突如表情を変えた和葉に対して一驚する。ついでに空笑いを含める。ずっと笑いを交える。動作を繰り返しながらも、精彩な表情を向ける。

和葉は途中からの訥々とした蘭の話し振りに気に掛ける。その話し振りが不可思議に思えてくる。蘭の心情を把握したいという気持

ちを露にする。新一関係だけあって和葉の幼なじみの西の名探偵・服部平次に共通する箇所がある筈。そんな事を思考に留めている和葉は、蘭の応える言葉に気を掛けていた。

「ううん。何でもないのでよ。ただ言ってみただけ」  
暫しの間辺りを一変させていた空気が和らぐ。  
いつもの蘭のように口許を綻ばす。

端正な顔立ちの蘭は薄笑いを浮かべながら不意に目線を動かす。

(えっ?)

和葉は、怪訝そうに蘭を凝視する。茜色に染まる空を仰ぎながら言い残した言葉を振り返る。

(本当はあの後、新一は

『夕日せいだつっつの!』と言い残したんだけどね)

進めていた足の速度を緩める。中々帰って来ない幼なじみの事が脳裏に映る。

過去の出来事に至って様々な思考を廻らせる。

脳裏に出来事を思い浮かべる蘭の頬は不意に紅潮する。

頬が艶やかに彩っていく。茜色の大きな光が蘭の視界内を射す。ら爛々とした夕日を一瞥する。

「蘭ちゃんどうしたん? さっきの事なんかあるんやなあ。顔が赤あこうなっているで!」

含み笑いをしながら蘭の表情を確認する。

未だに頬を紅潮させている蘭に向けて言葉を発する。

「夕日のせいよ」

不意に慣れた言葉を漏らす。

相変わらず頬を紅く染めながら視線を反らす。

蘭・本人も幼なじみの発した言葉を溢すつもりは無かったものの、その場の勢いで思わず漏れる。

蘭は足を停止させる。誤魔化すように夕日の方を見詰める。立ち止まった蘭に続いて和葉も足を止める。

仄かに映る雲全体に赤味を帯びる。颯爽とした風が彼女達の長髪を靡かせる。

稀にしかない艶麗な顔立ちを示唆して莞爾と笑う。

そのまま紅く染まった夕日をみながら。

蘭は密かに過去の出来事に振り返ってみる。

何かと照れ隠しをしながらも色々と楽しかった10年前の記憶を辿る。

今は、新一の声が聞けない。

現在の苦しみと過去の印象に残る出来事が同時に過る。現在の新一の代わりであるコナンも呟いた『夕日がせい』だという言葉が脳裏に浮かぶ。

「ねえ、和葉ちゃん」

「何？ 蘭ちゃん」

蘭の明るみを帯びた表情を確認する。安堵に至って訊ねる。不意

に頬を弛緩させる。

「和葉ちゃんは服部君との思い出が一番大切なの？」

蘭は、笑みを向けながら訊ねる。特徴ある澄んだ美声は耳に響き通る。

「うん。そうだよ」

素の表情を剥き出しにして嬌笑する。

(和葉ちゃんも私と同じ気持ちだったんだね) 和葉の率直な応答に自答する。そして、思い出の茜色の空を仰ぐ。僅かな笑みを含ませながらある一つの事を脳裏に浮かべる。

それは、10年前のように本当の新一と綺麗な夕日を眺める事。

そんな事を思い立てた後、帰路へ向かった。

(後書き)

最近何かと忙しい璃です。えっと内容の濃いものは中々書けないんですね。立てこんでいるのもあってごくごく通常の展開なものを残しています。自分が気に入ったストーリーを利用して書いているんですね。水平線の陰謀では隠れんぼの途中でコナンがサッカーボールを蹴っていたシーンあれが気に入っています。蛇足ですが紺碧の棺では中学生の新一が必見です。新鮮な感じがしますね。映画ではコナンは新一が言いそうな事をよく言いますね。

って同一人物だから当たり前なんですけどね。またしても蘭と和葉が出てきます。何となく書きやすいからです。でも私は新蘭では新一派です。えっとかなり脱線しますのでこの辺りで失礼致します。行の空白は携帯閲覧者の事を考慮してあけています。本当は行は詰まっているのだけど。因みに少し間違えがあったので修正致しました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5015c/>

---

夕日の思い出に...

2011年1月2日14時15分発行